**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１３回　（２０１５年２月１７日）**

**・第１３回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(11)頁**

・📖 p(10)　**シュリー・ラーマクリシュナのメッセージの特徴**

・📖（p(11)つづきを読む）それは個々人に即したものでありながら、同時に普遍的で、調和に満ち、**簡潔にして深淵な**メッセージである。

（解説）

　前回から引き続き、**シュリー・ラーマクリシュナのメッセージは、シンプル。だけど、とても深い**、ということをお話しています。**テーマは深淵ですが、それを身近な日常生活から例をひいて話しました。**

前回の最後では、**水に浮かぶ舟の例**や、**の葉の例**などを挙げましたね。これらはともに、**「無執着」を身近な例にたとえたもの**です。**「無執着であれば、物や楽しみ、家族、友人はいても、問題ない。その中（世俗の中）にいても問題ない」**です。しかし　執着がある人には束縛がある。束縛があると、次の段階は苦しみ・悲しみがあらわれます。また、執着があると、見返りのことも考えます。そして見返りがないと、失望します。

シュリー・ラーマクリシュナの弟子には、結婚せずにのちに出家した若い弟子たちと、結婚していた在家の弟子の、二つのグループがありました。

　のちに出家する若い弟子たちについては、本人にその自覚がなくても、彼らの将来を知っていたシュリー・ラーマクリシュナは、彼らをそのように育て面倒を見ました。スワーミージー、ブラフマーナンダジ、プレマーナンダジ、みな学生でした。当時、スワーミージーは大学生、トリグナティターナンダジは高校生でした。みな結婚はしていませんでした。

　ほかのグループは結婚していました。それだけではなく、子供もいました。特に昔のインドは若くして結婚する習慣がありましたから、高校生でも結婚する人はいたし、大学生はもちろん、修士課程に進む人はほとんど結婚していました。

Ｍさんのこと、覚えていますか？　シュリー・ラーマクリシュナは、Ｍさんに、最初、何をたずねましたか？（笑い）

（参加者）「あなたは結婚していますか？」

（「結婚している」との答えを聞いたタクール（シュリー・ラーマクリシュナ）の心情をまねて、マハーラージため息をつく）「ハア・・・」（笑い）

「子どもはいますか？」「子どももいます」「ハア・・・」（笑い）

　Ｍさんはそのとき考えた、結婚がそんなにダメですか？　子どもがいるのはそんなにダメですか？　そうではない。

シュリー・ラーマクリシュナはのちに説明しました、もちろんそういう意味ではない。あなたの顔に、とても高いレベルの信者の、「肉体的な印physical symptoms」を見ました。それで言ったのです。もしあなたが結婚していなかったら、もっともっと霊的な実践をできるだろうと。それで言いました。もちろん、結婚がだめではない、子どもがいるのがだめではない。

　Ｍさんの「肉体的な印physical symptoms」、まず、目。スワーミージーの目と同じ種類の特徴の目。そして、額でした。

目は、プールナーチャンドラ・ゴーシュ（☞『福音』口絵写真p748とp749の間。また、『福音』序論p(103)や、『ラーマクリシュナの生涯』p411~413にもプールナーについての文章がある）も同じ特徴でした。日本語で、なんと言うのですか？

（参加者）。

（参加者）ふつうの人にも目が大きい人がいますよねえ。

目が大きいというだけではなく、目が前に出ているみたいな特徴です。プールナーチャンドラとＭさんとスワーミージー、三人。

　Ｍさんについては、出会いのときに、結婚と子どものことを言いました。あとでは何も言わなくなった。そしてＭさんだけでなく、ラームチャンドラ・ダッタ、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュ、マノモハン、みんな結婚して、世俗の中にいましたね？　無執着の例の言うことはすべて、「結婚してもＯＫ、無執着が大事」。彼らはそれを実践しました。

　同様の例は、ほかに何がありますか？

（参加者）**ジャックフルーツの例**。「ジャックフルーツを割るときに、中のネバネバが手につかないようにするため、手に油をぬります。その油は、『無執着の油』です」。

そう。それから、**白鳥の例**。白鳥は、泳ぐときは水に濡れている。でも岸に上がれば、羽をバサッと振るだけで、水滴は飛び散ってしまう。もはや白鳥に水の影響はありません。これも無執着をシンプルにあらわした例。「執着の中にいても無執着はそのようにできる」。

使う例はシンプルだが、メッセージはとても深い。だから、深いから、**注意して読まないと、誤って理解することがあります**。いま、それについて、触れておきましょう。

シュリー・ラーマクリシュナは、話した例を説明しないことがありました。例を引くが、メッセージは言わない。だから、突然例え話が出てきているようで、読者は混乱することがあります。

ですから我々は、**例が示唆するメッセージは何であるのか、それを自分で考えることが必要**なのです。**前の話と、その次にでてくる例の、何と何が関係あるのか、どうしてその例を使ったのか、前後関係でよく考える。そうしないと、正しく理解はできない**のです。

また、ひとつ、別の例を紹介します。**魚釣りの例**。

魚をとるにはどうしますか？　土手に座って、魚、魚、魚・・・（笑い）と叫んでいたら、魚はとれますか？　とれません。では何が必要ですか？

（参加者）釣りざお。釣りざおで、魚を釣ってとります。

そうですね。インドではまず、スパイスのような強力なニオイがするエサを作り、池に投げ入れます。するとニオイに誘われた魚が寄ってきます。そこで、釣りざおと糸と針を用意して、釣りの準備をととのえます。糸をたらし、針に魚が食いつくまで、じっと座って待ちます。

池の中に、魚は絶対にいますが、魚、魚、魚・・・と口で唱えるだけでは魚はとれない。それにはたくさんの準備と忍耐が必要である。

これを今、**霊的実践のことと重ね合わせて考えてください**。神様、神様、神様、と唱えても神は来ないでしょう？　そのためにはたくさんの準備が必要です。そして忍耐も必要です。それがメッセージでしょう？　**例と、霊的実践の関係は何か、そこまで考えないと、理解は深くなりません。そこまでの深い理解が必要です。**

そして、魚、魚、魚・・・と口で言うだけでは、魚はとれない。つまり、理解したら、理解だけで終わらせない。実践も必要です。聖典を勉強しただけで、神様は来ませんね。そして準備が必要です。どんな準備？　心のきよらかさ。神様のことを集中して考えること。瞑想。神様の名前を唱える。また、１回の実践で、１日だけの実践で、神様はあらわれません。我々は実践を続けないといけません。忍耐が必要です。

　「**口で言うだけ、勉強だけで、神様は来ない。実践が必要です**」というメッセージの例はまだほかにたくさんあります。何がありますか？　たとえば、牛乳の中に？

（参加者）**牛乳の中のバターの例**。

牛乳の中に、バターはあります、絶対あります。しかし、バター、バター、バターと唱えてもバターは出来ない。バターをつくるためには何が必要ですか？

（参加者）かくはん。

それが最初ではないです。

（別の参加者）牛乳を静かに置いておく。

牛乳をそのまま置いても何も出来ません。（笑い）手作りのやりかたは、まず牛乳をあたためる。次に、前のヨーグルトを少し入れて、静かに置いておく。するとヨーグルトができるので、それをかくはんします。かくはんすると、水とバターに分離され、バターをとることができるのです。これも「霊的な実践には準備が必要です」の例。

それから、**シッディの例**。

酒を飲むとアルコールの影響で酔っ払いますね。木の葉にいろいろなものを混ぜて作るシッディという飲み物も、そこまではいかないが、ちょっとIntoxication気持ちいい状態になります。特別な「酔い」。シュリー・ラーマクリシュナは言いました、気持ちよくなりたいなら、口でシッディ、シッディ、シッディと言っているだけで何になるか。

皆さんは気持ちいい状態、つまり、神様の喜びや至福が欲しい。もしそれが欲しいなら、「口で言っているだけでは得られない。準備が必要です」。これも同じ例。

次は、とても**おもしろくて美しい例。シュリー・ラーマクリシュナは、ギャーナ・ヨーガの悟りのアイデアを説明するときにこの例を話しました**。

ギャーナ・ヨーガの方法は、「識別」ですね。サンスクリット語で、Neti「ネーティ」と言います。「イーティ（これ）」のあたまに否定のneをつけて「これではない」と言う意味です。それは、「これではない、これではない」と識別するやり方で、ヴェーダーンタの識別のふつうのやり方です。では、何の関係で、これではない、これではないと言っているのですか？

（参加者）永遠ではない、無限ではない。

我々は聖典から勉強しましたね、「ブラフマンは永遠で無限です」と。では次の段階。我々が、いま、認識しているものもブラフマンですか？　認識しているもの、すなわち、目で見ているもの、耳で聞いているもの、手で触っているもの、食べているもの、それらもブラフマンですか？　いま、その混乱をチェックしないといけない。認識したもののうち、「何がブラフマンではないか」、このチェックの方法を識別と言います。識別の基準は我々が聖典で勉強した、「永遠」と「無限」です。

　識別の方法は、我々が認識したものは、永遠と無限ですか？　いや、そうではない。それらは皆、時間と空間で限定されたものです。だから、無限ではない、永遠ではない。つまり、それ（ブラフマン）ではない。これが、「ネーティ、ネーティ」、つまり「これはブラフマンではない、これはブラフマンではない」。それが、識別。

たとえば、この本はブラフマンではない。この机はブラフマンではない。この人はブラフマンではない。なぜなら、その本は、机は、人は、時間と空間に限定されたものですから。①「この本は過去になかった。今あります。未来もない」から、時間に限定されています。②「この本は、今ここにある。別の場所にはない」から、この場所という空間に限定されています。すべて、そうではないですか？　始まりがあり、終わりがある。永遠ではない。

それでは、識別は、いつまで続くのですか？

　それは、真理を悟るまでです。真理を悟ると識別はなくなる。もう、ネーティ、ネーティとは言わない。無言。それだけではなく、至福の状態です。

結婚した若い娘が実家に帰り、友だち３人くらいとおしゃべりをしていました。そのとき、旦那さんが訪ねてきて、自分の友だちと客間に座っていました。インドでは、女性はお客様の前にあまり出ません。たとえばホーリー・マザー。ほかの人の前にはあまり出ませんでした。出てもカバーしていた。この話に出てくる娘の友だちは、結婚式に出ていなかった。だから、隠れた部屋から、旦那さんのグループを見て、こう話していました。

「あの方はあなたの旦那さんですか？」

「いいえ、ネーティ」

「あちらの方が旦那さんですか？」

「いいえ、ネーティ」

「その向こうの方？」

「いいえ、ネーティ」

「この方ですか？」

「・・・（無言）」

本当の旦那さんを指されると、奥さんは何も言わない。イーティ（はい）もネーティ（いいえ）も言わない。黙って、微笑むだけ。それで、友だちはわかります、ははあ、この方が本当の旦那さんだと。

悟りのときも同じ。ネーティ、ネーティも言わない、識別も終わった、議論もない。あるのは、至福だけ。とっても美しい。（☞『福音』p239）So beautiful.

このように、シンプルだけではない。とっても美しい例も『福音』にはたくさんあります。**それをよく感じ取って、イメージして、理解しないと、印象が深くなりません**。なぜなら、説明があまりないですから。

すべてを説明してしまうと、おもしろくないでしょう？　もし詩人が、自分のつくった詩に、説明を入れたら、突然おもしろくなくなります。絵もそうでしょう？

シュリー・ラーマクリシュナもそれと同じ。説明があまりないから、自分で理解してください。そして、そのように読みすすめると、喜びもひとしおとなるのです。

今日は、最後に、**子供のような信仰の例**をあげましょう。福音の中にいっぱいありますね、もし、神様を悟りたいなら、議論だけでは助けにならない、信仰が大事です、というお話。そしてその信仰は、子供のような信仰です。

たとえば、どんな例がありますか？

（参加者）**天国宛ての手紙を書いた子どもの話**。（☞『福音』p249）

それもひとつ。

それから、これも有名でしょう？　お父さんが出かける間、**息子に神様へのお供えを頼んだ話**。覚えていますか？

（参加者）その子どもは、像の神様が、実際にお供えを「食べる」と信じて、ずっと食べてくれるまで待っていました。

そうです。ほかのひとは思いつきませんか？　『福音』深く読んでください。おもしろい例がたくさんあります。

インドでは、うちに祭壇があって、いつもお父さんがお供えをします。それはとてもふつうです。（伝統的な習慣では、女性はお供えしません）毎日料理をつくって、つくった料理を最初に神様にお供えして、そのあと皆でお下がりを食べます。（お供えしたら、ドアは閉める。神様は一人で召し上がる。ふつうの人間はその様子を見ません）

あるときお父さんは用事で出かけなければならなかった。だから、息子に、「今日は、あなたが神様にお供えしてください」と頼みました。息子は、お母さんが準備した料理を、祭壇の神様の像にお供えしました。その子どもは、「神様、いま、あなたの前にお供えしました。どうぞ召し上がってください」。しかし考えてください。神様。像。動かない。しかし、その子どもの考えは、神様は本当にお供えを食べると信じていた。マントラだけでなく、アイデアだけでなく、想像だけでなく、本当に座っていただきますと信じていました。「神様、来てください。食べてください」でも、神様、動かない。（笑い）時間がたっても、まだ食べない。まだ動かない。

ついに泣き出しました、「神様、来てください。来て食べてください。お父さんがお供えすると食べるのに、なんで私がお供えすると、食べてくださらないのですか？」。おなかもすきます。神さまが食べないと食事もできませんから。（笑い）しかし本当は、お父さんがお供えしても同じ。（笑い）

そのとき、祭壇から、本当に神様が人間の形であらわれて、食べました。下げられたお皿を見てお母さんはびっくりした、お皿に何も残ってなかったから！　ふつう、何を考えますか？

（参加者）（笑い）その子が食べた！

しかし、その子が「神様が全部召し上がりました」と無邪気に言うのを聞いて、だれもその子の信仰を疑う者はありませんでした。（☞『福音』p306）これが**子供のような信仰**です。

別の話。

その子は、学校に行くとき、森をとおるのがとても怖かった。７歳か８歳くらい。兄弟はいないから、一人で行くしかなかった。そのことをお母さんに話すと、お母さんは、「怖くなったら、『マドゥスダンのお兄さん、マドゥスダンのお兄さん、来てください。来てください。私は怖いです、怖いです』と呼ぶのです。すると、必ず、マドゥスダンのお兄さんは来てくれます」と助言しました。「マドゥスダン」は、シュリー・クリシュナの一名です。「マドゥスダンのお兄さん」とは、本当は神様のこと。

子どもはそれを信じて、森で怖くなったとき、呼びました。何回も呼んで、最後には泣きながら呼んだら、神様はじっとしていられなくなった。マドゥスダンのお兄さんが現れました。「怖がらないで。私はここにいますよ！　私はあなたのお兄さんです。森の出口まで、私が連れていってあげます」。**「マドゥスダンのお兄さん」の話**。（☞『福音』p306）これも、**子供のような信仰**です

神様を悟るには、その種類の信仰が大事です。議論だけ、識別だけでは、十分ではない。そしてその種類の信仰は、心がきれいでないと、あらわれません。どうして子どもは信仰深いのか？　子どもは心がきれいですから。だから、お母さんの言うことは、すぐ信じます。疑いません。

　神様の像。神様の写真。動かない。人間の形になって、食べることなどできない。それがふつうの議論でしょう？　子どもは議論しないですね。あの部屋に幽霊がいるよ、とお母さんが言ったら、子どもはすぐ信じます。なぜなら子どもは心がきれいですから。

信者も同じ。心がきれいでないと、神様のことを聞いても、信じません。いますね？　神様のことを聞いても、ぜんぜん信仰しない人たちも。彼らは、とても世俗的な人たちですから、混乱と疑いばかりで、聞いてもぜんぜん信じません。しかし、心がもっともっときれいになると、もっともっと信仰は深くなります。それがバクティ・ヨーガの方法。信仰深い。子どものような信仰。Faith!　Faith like a child.

（『福音』勉強会第１３回、以上）